

黙示録の記録

第10章

甘くて苦い相続

著／ヘンリーモリス

訳／宇佐神 正海

黙示録の記録

目次

- 第10章 甘くて苦い相続
- 第11章 創造主の二人の証人
- 第12章 長い期間にわたる闘争
- 第13章 邪悪な三位一体
- 第14章 永遠の福音

第10章 甘くて苦い相続

地球は荒らされ、多くの者が殺され、世界の住人は、邪悪さと恐れで無感覚になっています。しかも宇宙と地球上の反乱が続いています。患難期は半分が終わっただけで、なお出番を待っている力ある天使が吹き鳴らすラッパがあります。

患難期の前半での恐ろしい裁きのすべては、小羊が天にあるご自身の御座で、創造主の御手から封印された巻き物を受け取った結果として起こったのです〔黙示録5章7節〕。世界の相続は、創造と血による贖いによって、小羊なるキリストのものだったのです。キリストは、墮落天使と邪悪な人々の大群すべてと、共にある大横領者であり詐欺師であるサタンから、彼の主権をもぎ取らなくてはなりません。御子は、正当な万物の相続者（継承者）だからです〔ヘブル人への手紙1章2節〕。

御国奪還に関するキリストの御業の中間点で、いわば、力ある贖い主、キリストの確実な勝利に関する新

鮮な洞察がヨハネに与えられ、ヨハネを通して私たちに与えられました。ヨハネと私たちは、今や長い世代にわたる大いなる闘争の、完全な意味と差し迫った成就を、理解する準備が整ったのです。これが黙示録10章の壮大な美しいドラマです。

虹の王冠

ヨハネは既に栄光の戴冠式を目撃していました。24人の長老たちが、金の王冠を受け取っていましたが「黙示録4章4節」、彼らはそれをすべて創造主の御座の御前に投げ出していました「黙示録4章10節」、キリストだけが多くの冠を付けるに相応しい方であると認めたのです。それから、小羊が封印された巻き物（贖われた被造物の不動産権利証書）を受け取った後で、ヨハネは、キリストが天から白い馬に乗って出てこれられ、ご自身の領地を征服し治めるために栄光の冠を受け取るのを見つめていました「黙示録6章2節」。

そして、もう一度キリストが力強い征服者で、人の想像を絶する最も荘厳な冠で頭を飾っているのを見ます。キリストは、かつてはいばらの冠を付けておられたが、今は創造主の御座にある虹を冠として頭上に戴いておられます。

黙示録10章1節 また私は、もうひとりの強い御使いが、雲に包まれて、天から降りて来るのを見た。その頭上には虹があつて、その顔は太陽のようであり、その足は火の柱のようであつた。〔新改訳〕

この力ある天使は主イエス・キリストご自身以外の何者でもあり得ません。旧約聖書のダニエル書と黙示録はそれぞれ、キリストの受肉前と復活後の状態のを現わし、キリストは、主の栄光ある天使（または使者）として幾度か現れています。

この天使は創られた天使たち（創造主の御前に立つ力強い七人の天使たち）の一人でないことは、通常の文章の前後関係と特にその天使の顕現の仕方から明らかです。ヨハネはキリストが天から降って、御自身地に立たれるのを見ました。その方は創造主であり贖い主で、地の相続者であり、今や、御自身が所有者であることを主張するために象徴的に降ってこられたのです。キリストがご自身の所有とする準備が今までにできているか否かは別として、キリストは少なくとも天と地においてご自身の主張を知らしめなくてはなりません。

キリストが黙示録の初めにヨハネが見た同じ栄光の人の子と同じ方であることは、三つの著しい特徴から明らかです。キリストが天から降ってこられた時、キリストは栄光の雲に取り巻かれていました。キリストの顔は太陽の輝きのようであり（それは太陽ではなく、いわば太陽のようで）、キリストの足は「火の柱」のようでした。これらは黙示録一章にヨハネが書き記した通りの特徴です。「見よ、彼は雲に乗ってくる」〔黙示録1章7節〕は始めの証でした。さらに、キリストが最初に天に昇られた時、ヨハネはその時もその所に居ましたが、「雲に迎えられて、その姿が見えなくなった」〔使徒の働き1章9節〕とあり、そして、キリストはいつか地に「同じありさま」〔使徒の働き1章11節〕で帰ってこられます。キリストは既に贖われた者たちと「空中で」会うために天から降ってこられた〔1テサロニケ人への手紙4章17節〕が、今、初めて再び地に立つのであり、キリストは雲に乗って来られます。

同様に、ヨハネが栄光の主を始めて見た時、「顔が、強く輝く太陽のようで」〔黙示録1章16節〕また、「その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゆうのよう」〔黙示録1章15節〕で、その足は真っ赤に熱したあつい長靴のようで、火の柱の外観をしています。

しかし、今度は何か重要な新しい特徴があります。美しい虹が創造主の御座の上にあるのをヨハネは何よりも先に見ました。そして、それは、ちょうどノアの日のように、裁きの最中にさえ恵みと救いがあることを物語っていました。しかし、今や虹は、力ある天使・キリストの頭を取り巻いています。それは、キリストが御座に座っていた時、キリストの頭上にあつた虹のようで、それから、キリストが地上に降りて来る時、キリストと共に旅してきたのです。

いずれにせよ、キリストの冠は、創造主の美しい虹であるというのが実に相応しい。原本にある定冠詞「The rainbow」は、創造主と特に関連した虹であることを示しています。聖書で虹について初めて出て来るのは、大洪水の直後で、創造主は「わたしの虹（bow）」についてノアに語った〔創世記9章13節〕。既に述べたように、虹は創造主の御座の周りにもエゼキエルによって見られていた〔エゼキエル書1章28節〕のです。

旧約聖書に、同じ言葉が虹と武器の両方（弓と矢）に用いられています。恐らく虹にはこうして、創造主は恵みと裁きの両面を持つ創造主であることを暗に示しているのです。すなわち、裁きの最中であつてさえ、創造主の恵みはなおさし延べられ、多くの人々が大いなる患難から救い出されます〔黙示録7章14節〕。同じ理由で、創造主の恵みをにべもなく拒絶する人々は、創造主の怒りを受けなくてはなりません。「まして、神（創造主）の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとみなし、恵みの御霊を侮る者は、どんなに重い処罰に値するか、考えてみなさい。」「ヘブル人への手紙10章29節〕

それはなんと驚くべき光景でしょう！ ヨハネは栄光の雲を伴って、美しい虹を戴き、もうひと度地に立つために天から降ってくるキリストを見たのです。私たちも同じように見るのです。

小さな本と七つの雷

黙示録10章2節 その手には開かれた小さな巻き物を持ち、右足は海の上に、左足は地の上に置き

力強い主が地に到着する時、キリストは陸地と海にまたがって立ちます。こうして両者の所有者であることを主張しています。結局、キリストはこれらの創造者であつた。「海は主のもの、主がそれを造られた。陸地も主の御手が造られた。」〔詩篇95篇5節〕

しかし、キリストは彼らの贖い主で継承者でもあるのです。そして、十字架の血でそのすべてを買い戻したのです〔コロサイ人への手紙1章20節〕。さらに、贖いの権利によって彼の者である私たちは、キリストとともに共に同の相続人です〔ローマ人への手紙8章17節、ヘブル人への手紙9章15節〕。それゆえ、キリストが地を取り戻し支配する時、私たちもキリストと共に支配するのです〔ピテモテへの手紙2章12節、黙示録1章6節、2章27節〕。

これは、明らかに、彼の手にある開かれた「小さな本」の意味です。これは以前に御座に居られる方から受け取った「本」〔黙示録5章7節〕と同じではありません。七つの封印で封印されたあの本（または、巻き物）は、一つずつ、順次に幾つもの封印が破られて、今までに、もう完全に開かれてしまったのです。すでに検討したように、この偉大な巻き物は地球に対する「地権証」を表わし、それを受け取り開く権利を持っているの

は小羊だけでした。小羊は、いま、陸地と海にまたがって立っていて、その所有者としての権利を完全に主張しているのです。

けれども、彼の手にある小さな本は別の本です。本はギリシャ語のビブリオンですが、小さな本はギリシャ語でビブリアリジョンです。ビブリオンの小型の物と認められます。その用語を私たちは本とか小冊子（パンフレット）といったらよいのかもしれませんが。

人が大きな土地を相続または購入した時、広い土地を多くのより小さい区画に分割することは、通常よくあることで、それらの区画は多くの買手に売られるか、それに続く相続人に渡されます。こうして、多くのものが、本来一つの素晴らしい相続財産から利益を手に入れることが出来ます。

それゆえ、最もありそうなことは、この小冊子は小区画の権利証であり、キリストの相続の部分であり、キリストの共同の相続者に与えられるべきものです。ヨハネは、携挙の時、携え挙げられたキリストを信じる者の代表としての資格でここにいるのです。この小型の巻き物は、立派な権利証の巻物が封印されていたように封印されていなかった。しかも、既に開かれていた。購入の代価は既に完全に払われており、キリストは共同の相続者にキリストが自由に自分の相続財産のどの部分でも慈悲深く与える事が出来るようになります。

黙示録10章3節 獅子がほえる時のように大声で叫んだ。彼が叫んだとき、七つの雷がおの声を出した。

ここで、黙示録1章に与えられているキリストの描写にさらに二つの節が繋がります。それらは、荘厳に

響きわたるキリストの声を書き留めています。それはキリストの大きなラッパの音と「大水の音」のようでした〔黙示録1章10〜15節〕。ここでは獅子の咆哮になぞらえています。キリストがどのような大声で叫んだかの記録はありませんが、本文で、地にすむ人々に大いなる略奪者を拒否し彼らの真の主に従うようにと呼びかけている所有権者の力強い宣言であったことを示しています。

恐ろしい裁きにも関わらず盲目的に反逆し続けます。それに対するただ一つの応答は、天からの荘厳な七重の雷鳴であった。けれども、これらの雷鳴は、稲光に続く雷鳴のような物理的現象ではなく、知的メッセージを伝えている音、すなわち声だったので。

ヨハネは、創造主の御座から稲妻と雷鳴と声が起こったことを以前に記していた〔黙示録4章5節〕。主が地に立つた時、主の大きな声に続いてこれらの七重の雷のような声、創造主の御座そのものから発せられた。この雷のような声は七つの宣言そのものであった可能性があります。

虹は常に私たちにノアの大洪水を思い出させます。そして、今、七つの雷も同じようにノアの洪水を思い出させるのです。なぜなら、洪水の時、人が虹を初めて見たように、雷の音を洪水の時、人は初めて聞かされたのです。洪水前、雨はなかった〔創世記2章5節〕。こういうわけで、虹も雷もなかったのです。

創造主の御座から轟いて来る七つの雷は、詩篇29篇に記されている七重の「主のみ声」に明らかに対応しています。この詩篇は大洪水の際地上と天上に起こった素晴らしい光景です。完全な解説のためにわたしの著書「sampling the psalm」(sandiego.ca 章 creation-life publishers, 1973) の38〜43ページを見てください。ノアの洪水との関係が「主は大洪水の時に、御座に着かれた」という10節のことで証明されているのです。この用語は mabbul です。どこで用いられても mabbul は、特別な災害にあてて用いられています。

この詩篇で、「主のみ声」という句は七回あります。その各々は洪水に関する新しい局面をもたらします。最初の節は3節で、人がかつて聞いたことのない大きな雷鳴を初めてもたらしています。すなわち、「主の声は、水の上であり、栄光の創造主は、雷鳴を響かせる。主は、大水の上にあります。」〔詩篇29章3節〕その時以来、創造主の声が雷鳴を通して聞かれる機会が他にありました。〔ヨハネによる福音書12章28〜30節〕。

この時点で、創造主の裁きは、全地に大洪水の水のような激しきで訪れます。そして最悪のラッパがなお吹かれようとしています。このような時、創造主の怒りから注ぎ出されるため、同じような七重の雷鳴がふさわしいのです。

けれども、あの裁きに慈悲があったのです。したがって、この時にも慈悲があるのです。事実、キリストの冠そのものは、まさに荘嚴な虹であり創造主がなお地に思いやりを示しておられる証であり保証なのです。実際のところ、詩篇29篇の最後の雷鳴すなわち「主の声」は、うずもれた地球から新しい命をふるい起こし、洪水の水を散らして新しい世界を始めます。「主の声は、雌鹿に産みの苦しみをさせ、大森林を裸にする。その宮で、すべてのものが、「栄光」と言う。」〔詩篇2篇9節〕。この廻りの雷鳴は、詩篇104篇6、7節にある雷鳴のこだまと思われ、その詩篇はまたノアの洪水の水が引いたことを記しています。「あなたは、深い水を衣のようにして、地をおおわれました。水は、山々の上にとどまっていました。水は、あなたに叱られて逃げ、あなたの雷の声で急ぎ去りました。」〔詩篇104篇6〜7節〕

御座から発せられた七つの雷鳴が語ったことが何か告げられていませんが、ヨハネは明らかにその伝言を理解したのです。けれども、彼らが語ったことを私たちが知ることは、創造主の計画であり、事実をヨハネは、この事実を記録することを認められました。まさにその情況は、大昔彼らが洪水で語った時の伝言が自然界に対する大きな裁きの伝言であることを要求するが、虹は、洪水の時そうであったように、また裁きは慈悲で緩和されることを要求しています。実際に、全世界を破壊する裁きは、さらに少しの間、延期されるとの暗示があるのです。

黙示録10章4節 七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天から声があつて、「七つの雷が言ったことは封じて、書きしるすな。」と云うのを聞いた。

これは、初めは奇妙な命令に思われます。創造主は七つの雷鳴の命令をヨハネが記すのをただ止めようとしたのでしょうか、ヨハネがそれらについて言及する必要は全くないように思われます。

明らかに、創造主が私たちに知らせようとしたのは、七つの雷鳴が語ったことだけでなく、彼らの語ったことの実現が遅れていることもです。あたかも創造主を敬わない者の最終的破壊の時に来て、雷鳴は、ノアの洪水の時にあつたように、その最後の破壊を呼び出す準備が整ったことを示しているかのようです。キリストは天から降って来て、地と海の所有者であることを宣言していた。しかし、創造主はその時もう一度介入した。みたところ今や和解がたい、長く続いた人の反逆にもかかわらず、創造主はなお辛抱強く、なお手を大きく広げて、罪びとたちの悔い改めを待っています。雷鳴が語った後でさえ、創造主は「なお、七日間」と告げて〔創世記7章4節〕その実施を延期して、洪水前の人に最後の機会を与えられた。今、創造主は再び「なおしばしの間」と言っておられるようです。ソドムの日のようにわずかの正しい者のためにさえソドムを滅ぼさないと約束された方なのです。

ダニエルの預言の終わりに、まさに同じような場面があり、それは恐らくこの同じ場面です。ダニエルは恐ろしい患難について天使が語っているのを聞いていました〔ダニエル書12章1、2節〕。その患難はご自身の民（イスラエル人）が救い出され甦る直前に来るはずで。

しかし、その時、ヨハネのように、ダニエルは、「あなたは終わりの時まで、この言葉を秘めておき、この書を封じておけ」〔ダニエル書12章4節〕と告げられていました。「いつになって終わるのですか」〔ダニエル書12章6節〕との質問に答えて、ほかの天使が、「その右手と左手を天に向けて上げ、永遠に生きる方をさして誓って言った。」「それは、ひと時とふた時と半時である。」〔ダニエル書12章7節〕。

ほかの聖書のケ所〔ダニエル書4章16節、7章25節；黙示録12章14節、13章5節〕から、その「時」は「年」に当たり、したがって、一時プラス二時プラス半時は三年半を意味することが分かります。それからダニエルは、「このことばは、終わりの時まで、秘められ、封じられている」〔ダニエル書12章9節〕と告げられていたのです。

ダニエルもヨハネも最後の日に邪悪な人々の世に下される最後の裁きの恐ろしい言葉を聞いていたようです。しかし、二人は共に、しばしの間、裁きは差し止められるとも告げられていたのです。最後の刑が施行されるまでなお三年半あるはずで。その間に、裁きは激しさを増し、人々は、やがて来るさらに大きな怒りから逃れる道を選ぶことができるはずで。

黙示録10章5節　それから、私の見た海と地との上に立つ御使いは、右手を天に上げて

創造主は、常に御子を通して〔ヨハネによる福音書1章18節〕、御自身を様々な状態で現わされます。ヨハネにとって、

キリストは栄化された人の子〔黙示録1章13節〕として、御座にいます創造主として〔黙示録4章2、11節〕、長老たちの真ん中にいる小羊として〔黙示録5章6節〕、総ての聖徒たちの祈りを携えた天使として〔黙示録8章3節〕、天からの大いなる声として〔黙示録4章1節〕見させられ、また聞かされていたのです。そして、今や、七つの雷鳴と虹の冠を付けた力ある天使として現れたのです。キリストは無限な方であると共に有限な方、どこにでもおられる偏在の方であると共に特定の場所におられる方、多くであるが唯一の方、創造主の御子であると共に人の子なのです。

ヨハネはキリストをまさに雷鳴として、それから、雷鳴のことばを封じるように彼に指示している天からの声としてたつた今聞いたのです。そして、今や、再び彼の注意は陸と海にまたがって立つ天使としてのキリストに向けられます。この時、ヨハネは手を天に向けて挙げ、御座にいます方に向かってその方に語る準備をしている天使をじつと見つめています。

キリストが手を天に向けて上げるこの行為は、上述のように〔ダニエル書12章7節〕明らかに彼をダニエルが見た人、さもなければ天使と同じと見做しているのです。黙示録の10章6節で、私たちは、ダニエルが見た人のように、正確にキリストは「永遠に生きている方をさして誓った。」ことが告げられています。

この事実は私たちに働きかけ、ダニエルがその方をさして記した記述をもっと正確に問いただすように強いるのです。私たちがそうする時、彼は、栄化された主、救い主イエス・キリストその方であることをもう一度認めるのです。ダニエルはその方を「亜麻布を着た人」〔ダニエル書12章7節〕で、その方は、ダニエル自身年老いた時、三週間の断食と祈りの後はじめて見た方と同じ方であるとサイラス王の法廷で、認めたのです。「私が目を上げて、見ると、そこに、ひとりの人がいて、亜麻布の衣を着、腰にはウファズの金の帯を締めていた。

そのからだは緑柱石のようであり、その顔は稲妻のようであり、その目は燃える松明のようであった。また、その腕と足は、磨き上げた青銅のようで、そのことばの声は群集の声のようであった。」〔ダニエル書10章5〜6節〕との記述に注意して下さい。同じ方についての記述であることは確かです。この人は黙示録の初めでヨハネが見た方と同じ方です。対応する特徴に注意して下さい。

■ダニエル10章5〜6節

亜麻布の衣を着た

金の帯を締め

顔は稲妻のよう

目は燃える松明のよう

腕と足は、みがきあげた青銅のよう

声は群集の声のよう

■黙示録1章13〜16節

衣を着て

金の帯を締めた

顔は太陽のよう

目は、燃える炎のよう

足は光り輝くしんちゅうのよう

声は大水の音のよう

黙示録の記述とダニエルの記述はほぼ完全に一致しています。有意の違いはただ一つで、ダニエルはその方の身体は光り輝く水晶のような石、緑柱石のよう書き記しています。しかし、その方は足まで垂れる衣を着ていたのです。したがって、身体の見える部分は、ただ頭と手と足でした。ヨハネはキリストの頭は雪のように白いと書いています。そして二人ともキリストの足は光り輝くしんちゅうのよう書き記しています。したがって、これらの記述は同じように一致しているのです。ダニエルは彼を「人」と見たが、明らかに死

ぬべき人よりはるかに偉大な方で、ヨハネは、その方は「人の子」のようであったと言ったのです。ヨハネは「死人のように彼の足もとに倒れた」〔黙示録1章17節〕と記し、ダニエルは、「力が抜け、力を失った」〔ダニエル書10章8節〕と記しています。明らかにダニエルとヨハネは同じ方をさしています。

しかし、一つの大きな違いがあります。ダニエルの場合「この大きな幻を見た」〔ダニエル書10章8節〕とあるように、主の顕現でした。それは受肉以前の状態にあるキリストでしたが、ご自身をしばしカルバリの十字架以後の永遠にとられるはずの姿に御自身を装われていたのです。けれども、ヨハネは、幻のキリストを見たのではなく、実在のキリストを見たのです。ヨハネは、終わりの時の大いなる出来事に直接参加するために時に先立って移されたのに、ダニエルには、ただ預言的幻が与えられたにすぎません。ヨハネは受肉前の主の顕現としてではなく、「いつまでも生きてる」〔黙示録1章18節〕キリストを見たのです。

もはや時が延ばされることはない。

そして、今ヨハネとダニエルに現われたこの同じキリストが、また、明らかに力ある天使とも同じであることになります。そして、陸地と海の地権者（葬られた小羊としてご自身の血でそれを購入され、既に所有しています）であることを主張し、天に向けてご自身の手を挙げ、エメラルドの御座についておられる永遠に生きておられる方をさして誓って云われます。

黙示録10章6節

永遠に生き、天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを

創造された方をさして、誓った。「もはや時が延ばされることはない。」

永遠に生きておられる方はもちろん御座に着かれていた創造主「黙示録4章10〜11節」であり、また小羊「黙示録5章2節」です。より偉大な方は誰もあり得ません「ご自分よりすぐれたものをさして誓うことがありえないため、ご自分をさして誓い」「ヘブル人への手紙6章13節」とある通りです。

最後の裁きはいわば、なお一時と二時と半時の間、延ばされているけれども、三年半を越えて延ばされる事はないのです。これが「もはや時が延ばされることはない」の宣言の意味です。時空連続体の宇宙が永遠に確立し、宇宙空間が消滅することがないのと同様に、時の終わりもありえないのです。事実、新しい地では時間は月単位で数えられます「黙示録22章2節」。「創造主の奥義が完了する時」はもうすぐだというのは正しいのです。

創造主ご自身であることは、明らかであり、私たちを創世記2章1節に連れ戻します。「こうして、天と地とそのすべての万象が完成された。」さらに明白なモーセの律法第四戒のことはへも言及しています。「それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り」「出エジプト20章11節」と。

間もなく万物の完成がなるとの宣誓は、万物の創造があった事実に基づくのは確かであり、とても大切です。創造によらない宇宙は、必然的に目的もない宇宙になります。創造で始まったのだから、(もちろん創造は特殊創造を意味します。自然発生的創造は、自然法則は保存的または破壊的で決して創造的ではないのでうつろな概念です)、当然のことながら、創造主は移り気な方ではあり得ないので、宇宙には聖なる目的があり、その目的は確かに成就するはずでです。

創造主は、実に長く耐え忍んでおられます。創造主は贖いと言う素晴らしい魅力ある計画を成し遂げられ、全ての人が悔い改め救われることを望んでおられます「Ⅱペテロの手紙3章9節」。キリストは何年も何年も、何世紀も何世紀も失われた人が救い主を受け入れるのを待っておられますが、キリストは人々の意思に反して強制するようなことはなさいません。最後に、ご自身の意志に反して、残念ながら、主の日の恐ろしい裁きをもう少しで始めるようです。しかし、このような中でさえ、多くの者が救われ、主は大患難の中からキリストに来る人々を喜んで受け入れて下さるのです。

三年半に及ぶ波のように継続して押し寄せる懲罰を通して心を頑なにし続ける人々は、確かに全く希望はないし、どうやらそのように思われます。それにもかかわらず、あらゆる恵みに満ちた創造主は「Ⅰペテロの手紙5章10節」、なお三年半このような怒りの鉢を耐え忍ばれ、忍耐の杯の最後の一滴まで余すところなく空にします。しかし、それは延期の最後となり、それから終わりが来ます。

黙示録10章7節 第七の御使いが吹き鳴らすうとしていたラッパの音が響くその日には(「日々」)、創造主の奥義は、創造主がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する。「

ヨハネはもはや延ばされることはないとの約束を受けます。同じキリストが受肉以前の状態でダニエルに語られたように、第七のラッパは三年半の間こだまし続けていますが、終わるのです。この最後のラッパが鳴り響いている間、救いの期間が延ばされることは、第七の天使の声(ギリシヤ語 phone は音を意味します。)が響く「日々」との言及で示唆されているのです。

始めるといふ言葉は：実際にはしようとしているの意味で、ヨハネが書きとめようとした『黙示録10章4節』と同じ方法で、第七の天使が吹き鳴らすようにしています。けれども、その準備はまだ十分にできていません。第二の禍は自然に経過していくのではなくて『黙示録11章14節』第七の天使がラッパを吹き鳴らしてから来るのです『黙示録11章15節』。力ある天使がヨハネに保証していることは、たとえ七つの雷鳴が宣言している最後の破壊が遅れても、それはほんの短い時間だけです。第七のラッパを、吹き鳴らす準備は、ほとんど整っていて、特に三年半の間、その音がなお天で反響している間に、創造主の奥義も「また成就される」のです。

しかし、この「創造主の奥義」とは何でしょうか。ギリシャ語の *musaeion* (ムステリオン) は通常ギリシャの神秘的宗教に入会するために与える秘儀に関して用いています。たとえ厳密に同じ用語が旧約聖書に出ていないけれども、預言者たちは、創造主の奥義が究極的に成就するのは確かだと言っているのです。

新約聖書に幾つかの奥義が言及されていますが、ここでの文章の前後関係は、強く次のことを示しているように思われます。すなわち創造主の奥義は創造主のすべての目的と計画に対する言及だということです。何故聖なる創造主はそんなにも長く悪がはびこるのをお許しになったのでしょうか。何故正しい者が苦痛を受けるのでしょうか。イスラエルに対する、異邦人に対する、また教会に対する創造主の究極的目的は何でしょうか。究極的創造における創造の多くの目的の成就に関するこれらの質問やその他の多くの調停の問題がある日すべて答えられます。そして、それは、恐らくここで創造主の奥義と呼ばれているこれらすべての組み合わせなのです。いずれにせよ、人に関係するこのような創造主の奥義すべては、最後のラッパが鳴り響く日々に最終的に解決され、理解されるのです。

事実、預言者はこのような約束をずっと昔に受け取っていました。ダニエルに対しては、『これらすべてのことが成就する』『ダニエル書12章7節』と約束されていました。ゼカリヤに対しては、「その日には、主はただひとり、御名はただ一つになる」『ゼカリヤ9章9節』と約束されていました。詩篇の著者は「彼の名はとこしえに続き、その名は日の照るかぎり、いや増し、人々は彼によって祝福され、すべての国々は彼をほめたたえますように。」『詩篇72章17節』と預言していました。

終わりはまだ来ない

完成は確かだ、終わりは輝かしいけれども、ヨハネはより長い間待たなくてはなりません。地上にいて迫害されている聖徒たちと同じように、天にいる殉教した聖徒たちも待たなくてはなりません『黙示録6章8〜11節』。さらに、既に天にいる人々と地上にいる人々で、贖われている人々は、彼ら自身の嗣業を受け継ぐ時をなお待たなくてはなりません。ちょうど主イエス・キリストがなお御自分の持ち物を完全に所有するのを延ばしておられるように。彼らは待っている間さえ、特権と義務をある程度共有できますが、これは次の場面の問題であるように思われます。

黙示録10章8節 それから、前に私が天から聞いた声が、また私に話しかけて言った。「さあ行って、海と地との上に立っている御使いの手にある、開かれた巻き物を受け取りなさい。」

この天からの大きな声が再びヨハネに語りかけます。今回は三度目で『黙示録4章1節、10章4節』、その声は、彼

に最も無遠慮な行動と思われることをするように指示します。力ある天使が、陸と海になおまたがって立っていて、なお万物の所有権を主張しています。創造に於ける創造主の目的すべてがすぐにも完成するとたつた今宣言された方―すなわちヨハネが近寄って彼の手から巻物を受け取るように命じられた方です。

その巻物は開かれたままであり、差し伸べた彼の手にあります。その手は明らかに、確実に成就するとの宣誓を持って天にむけて延べられていたまさにその同じ手です。前述の小さな巻き物は、ヨハネに与えられるキリストの特に多くの嗣業を表わしていて、原則として、それは信者一人一人に適切に分け与えられるとるのが最もふさわしいと思われれます。

私たちがすでに言及したダニエル書の平行個所で、あの預言者も割り当てられる嗣業を待っています。ダニエル書はまさにこのような約束で終わっているのです。「彼は言った。『ダニエルよ。行け。このことばは、終わりの時まで、秘められ、封じられているからだ。』」^{12章9節}・・・あなたは終わりまで歩み、休みに入れ。あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ。」「^{12章13節}」同じようなやり方で、ずっと昔、ヨシユア（彼の名はイエスの名です）は、創造主が約束されたカナンの地にある相続地（嗣業）を小さく分けて、くじで各部族と家族に区分けし分配したのです。^{「ヨシユア記19章51節」。}

黙示録10章9節　それで、私は御使いのところに行って、「その小さな巻き物を下さい。」と言った。すると、彼は言った。「それを取って食べなさい。それはあなたの腹には苦いが、あなたの口には蜜のように甘い。」

ヨハネはどんなに凶々しく思われようとも、天からの声に素早く従うため、すぐさま天使にその本を下さいと言つて近づきました。携拳後、信者たちは、みなキリストの身体のように栄化された身体を持ち^{「ピリピ3章20～21節」}、どの方向にでも空間を急速に横切ることができ、同時に遠方にある出来事を見聞きすることができるのです。私たちの現在の身体は、現在の自然界の物理的力の体系（重力、電磁力と核力）に支配されるように組み立てられていたのです。けれども、キリストの復活の身体は、真の身体であるけれど、現在の物理法則に縛られなかった。キリストは、地球から天に速やかに移動し、壁を通り抜けることができた。恐らく、私たちはキリストのようになるので^{「ヨハネの手紙3章2節」}、私たちもこのような可能性を持つでしょう。時間によってこのような状態に移されていたヨハネは、命令された時、天から地にすばやく移動できるはずで、このようにして、ヨハネはその天使の所に行つたのです。

その小さな巻き物を下さいという要求を受けてその天使（すなわち、キリスト）は、すぐそれをヨハネに与えます。それは、結局彼の嗣業です。けれども、重大な結果があります。すなわち、それは、多いなる祝福と共に厳粛なそして苦い責任があるのです。

彼はその巻物を食べるように天使に指示された、一見それは最も奇妙な命令のようです。それでも彼はこの命令を彼以前の他の預言者の経験でよく知られている重要なできごとに似ていると認めます。ダビデは創造主の律法は「蜜より甘い」^{「詩篇19篇10節」}と言っています。また、他の詩篇作家は同じように創造主のことはを密になぞらえています^{「詩篇一一九篇一〇三節」}。エレミヤは、15章16節で同じような証をしています。

エゼキエルは食べるように哀歌と、嘆きと、悲しみが記された「一つの巻物」を与えられた。彼が命じられたようにそれを食べると、その伝言は苦くて、創造主の預言者として全イスラエルが彼に敵意を抱くはずであったけれど、口には蜜のように甘かった^{「エゼキエル書2章8～34節」}。

預言者だけでなく、有史以来創造主の忠実な証人は、皆同じような経験を証言しています。創造主のことばとその教えは、大いなる喜びで蜜より甘く、創造主を本当に知り仕える人の心にある喜びです。しかし、他の者はそれをひどく拒否し、その証に反対し滅ぼそうとし、時には、その証人となる人々を虐殺さえします。そして、もしこの様な事態が昔、本当にあったとするなら、患難期に地上に生きているキリストのしもべすべてにとって、患難期にはかつてより一層このような状況に遭遇することになるでしょう。けれども、ヨハネは、天に携挙された聖徒を代表していて、もはや地上の迫害者によって危害を加えられることはあり得ないのです。したがって、彼が食べた巻物は、一般に主のことばではなく、特に、彼自身の嗣業を表わしています。

それにしても、称賛されるキリストとの共同相続人「ローマ人への手紙8章17節」として、相続の責任においてさえ、彼はキリストと共に苦しまなくてはならないのです。これがなぜ地権証の巻物が驚くほど口に甘く、腹に苦いかの理由です。キリストとの共同の相続人は、キリストと共に支配するばかりでなく、キリストと共に裁くのです。実行者としてではなく、少なくとも観察者として、私たちは残っている裁きに参加しなくてはなりません。私たちがキリストと共にハルマゲドンに、すなわち地上にやってくる時、そのクライマックスになるのです。「ゼカリヤ書14章5節、1テサロニケ人への手紙3章13節、黙示録19章14節」。

主は悪者の死を喜ばない「エゼキエル書18章23節、33章11節」し、私たちも喜びません。キリストは長く耐え忍んでおられます。したがって、私たちもそうすべきですが、悪者が裁かれなければならない時が来ます。救われずにいるこれら残りの者は友でありまたは愛した人か、または彼らのためにキリストが死なれた、又は、キリストに勝ち取ろうと務めるべきであった単なる大衆かは別として、彼らは最後に裁かれなくてはならないのです。

そして、明らかに、患難期の中間点の初めに、私たちが代表してヨハネが、彼自身の生涯にふさわしい相続の権利証を受け取る時、すべての復活した聖徒たちはキリストと共にこれらの最後の裁きに参加しなくてはならないのです。「あなたがたは、聖徒が世界を裁くようになることを知らないのですか。「1コリント人への手紙6章2節」これは必要でしょうが実に苦い経験となるでしょう。「彼らの口には、創造主への称賛、彼らの手には、もろ刃の剣があるように。それは国々に復讐し、国民を懲らすため、また、鎖で彼らの王たちを、鉄のかせで彼らの貴族たちを縛るため。また書きしるされたさばきを彼らの間で行なうため。それは、すべての聖徒の誉れである。ハレルヤ」【詩篇一四九篇6、9節】

これがすべてではありません。患難期に殉教した聖徒たちは、最後に甦り、同じように「裁きを行う権威が彼らに与えられます」【黙示録20章4節】。その時、患難期以前とその最中に救われた全ての聖徒は「千年の間キリストと共に支配」【黙示録20章6節】します。勝を得る信者は皆「鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして彼らを治める。わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じである。」【黙示録2章27節】とある通りです。ただし、裁きの他の義務「私たちは御使いをもさばくべき者だ、ということ」を、「知らないのですか」「1コリント人への手紙6章3節」となるのです。

黙示録10章10節　そこで、私は御使いの手からその小さな巻き物を取って食べた。すると、それは口には蜜のように甘かった。それを食べてしまうと、私の腹は苦くなった。

キリストの相続に与るのは、少なくとも、最後の裁きの後まで、すべてが甘くて喜ばしいことばかりではありません。小さな巻き物を食べる象徴的行為は、ヨハネに強烈なストレスを与えました。そして、他のすべての信者にも同様に、強烈なストレスを与えるのです。キリストの嗣業を受け継ぐ大いなる名誉には真に甘くて苦い特別な性質が伴うのです。その日には、私たちは復活後、キリストの裁きの座で完全に自分自身の罪の思いが清められ「エペソ人への手紙」^{3章11、15節}、キリストの義の完全な要求とキリストの慈悲と愛のその大いなる深さを知ります。私たちが墮落した天使と悔い改めない人々の必要な裁きに参加する時、私たちは、彼らの正しさを完全に受け入れますが、また彼らが死ぬ時キリストと共に涙するのです。

巻き物は食べ終わるや否や苦くなるのに注意して下さい。このことはさらに共同の相続に伴う甘く苦い側面両方がすぐに始まることを示しています。患難期の最初の半分は、携挙された聖徒に関する限り、奉仕のための監視と準備の時となり、後の半分には、完全な参加が要求されます。

黙示録10章11節 そのとき、彼らは私に言った。「あなたは、もう一度、もろもろの民族、国民、国語、王たちについて預言しなければならぬ。」

結局、主イエス・キリストは、虹の冠を戴いた天使の人格で、しもべヨハネに最後のことを発します。封印とラッパの恐ろしい裁きを見ていた後で、それから、地球の相続を主張するため天から降って来られた主を見つめ、最後に七つの雷のとどろく宣言を聞いて、ヨハネは、彼が見たこと「黙示録1章11節」を本に書くという実に差し迫った使命がまさに終ろうとしていることと考えたのは当然かもしれません。

しかし、為すべき仕事は半分しか終わっていないかったです。ヨハネは、来ようとしている苦い裁きに参加するだけでなく、それらについても書かなくてはなりません。もちろん、彼は「彼が見たこと」すなわち、歴史を書いていました。しかし、彼が書いていたことは読む人々にとって、それは預言となるはずで

それゆえ、彼はもう一度筆をとらなくてはなりません。このギリシャ語 *epi* (エピ) はただ「…について」と訳すのが良いのです。彼が書かなくてはならない人々について、なお多くの民族、国民、国語、王たちがいました。これらの人々は有史以来、創造主の積もり積もった怒りの頂点をなす対象になるはずの人々です。すべてを打ち砕く災害にも拘わらず、世界にはなお多くの人々がいました。そして、これらの人々は創造主に敵対する一つの最後の絶望的攻撃で結び合わせられます。さらに、なお生きて証をし続けている多くのクリスチャンがあり、取り返しのつかないほど心を頑なにしていない多くの救われていない人々がいます。彼らは何らかの方法でなおもう一度救いを要請されるかもしれませんが。ヨハネは、これらのことを書かなくてはなりません。ことによると、彼らは終わりの日々について聖書を読むかも知れないので、これらの人々のためにさえ書かなくてはなりません。

